

オーブ<sup>®</sup>連合首長国 ハイズ<sup>®</sup>というオペレーター

/Null

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ガンダムSEEDの世界へと転生したセレン・ヘイズのお話

# 目次

オーブ連合首長国	ハイズというオペレーター	1
----------	--------------	---

## オーブ連合首長国　ヘイズというオペレーター

燃え盛る炎の中に見えるのは、この戦争によって破壊された国の姿。

軍事施設と思われる場所は、文字通り壊滅。病院や学校、民間の施設であつても例外はない。

無差別？残虐？非道？

…いや。戦争なんて、どの世界でも同じようなものだ。全てを奪い、全てを焼き尽くすまで終わらない。それが真理なのだ。

戦争には勝たなければ意味がない。

死んで得られるものなど、何も無いのだから…。

「ウズミ！」

「…ヘイズ、か」

通信越しに映るそいつの名はウズミ・ユラ・アスハ。今まさに戦火に包まれているオーブ首長国連邦の首長であり、私たちを雇った雇い主である。

「今回は色々と、迷惑をかけたな。報酬はきちんと全額支払つておる。長きに渡るお前たちとの契約もこれで終わりだ」

「チツ。最初ハナからそのつもりだったんだろうが」

相手は地球連邦。こちらは補給も後ろ盾も無い、小国の軍隊のみ。結末など、誰が見ても分かりきつていた。

同じ地上に住んでいるというのに、1国だけが対立したらどうなるか。そんなもの火を見るよりも明らかだ。足並みの揃わない小国に対して大国が行う事なんてただ一つ。

武力による見せしめだ。

従わないとどうなるか——

… まるでラインアークだな。

企業支配を肯定しない自由主義の集まり。「来るもの拒まず」の精神で様々な人間を受け入れたあの組織。

だがその結末は破滅だ。

あの戦闘でラインアークはホワイトグリントを失い、そのままずるずると破滅への道を辿った。

結局、それも分かりきっていた結果。

伝説のレイヴンとはいえ、数多くのリンクスを抱えている企業連に勝てる未来などない。

… まあ、ステイシスとの戦闘は見事だったがな。

この国はラインアークよりは上手くやったが、結果は似たようなものだ。己たちの信念を貫くために。この戦争の結末を悟りながらも自身の破滅を選んだ。

私は忠告したぞ？この居場所を提供してくれた貴様らに、恩義を感じてな。だが、結局はこのザマだ。

何も変わっていない。あの世界と同じだよ、ウズミ。

「貴様らはどうする気だ。言ったはずだぞ？死んで得るものなど何も無いと」

「確かに、その通りやもしれぬ。ここで我々が死ねば何も残らぬと。だがなヘイズ。国とは人、そして意志なのだよ」

「…」

「人無くば国は成らず。意志無くば人は来ず。幸い、民間人の避難は

完了している。そして、我らはここで想い、そして意志を残した。それは無事、宇宙へと飛んだ」

ウズミの視線の先には、マスドライバーによって打ち出されたカグヤの姿。その船体には白い機体と赤い機体、そして黒い機体が見える。

「あとは、我らの責めだ。貴様らは何処へなりとも行くがよい。それが山猫というものであろう？」

「…フツ。そうか… なら私たちもこれからは好きにさせてもらおうさ」

「出来るならば彼らの、そしてカガリの手助けをしてもらいたかったが…」

「フン。私たちは傭兵だ。どの陣営に付くかなどは契約次第。明日には敵になっているかもな」

金も受け取った今。こんな敗戦確定の陣営に居座る意味などない。私たちが傭兵。己の命を守るのは己のみ。

…だが。

「この弾薬は貴様らでしか製造できない。ならば答えなど分かっているだろう」

「すまぬな」

「言ったはずだ。好きにする、と」  
宇宙へと放たれた彼らが平和の象徴たる鯨となるか、それともシャチとなるか。

そんなもの、あの世界で失敗した私には分かるわけではない。

だが、貴様は信じているのだろうか？

彼らを。そして、朝日に照らされ暁色に輝く、焰の意志というものを。

ならば、最後まで見届けてやろう。

彼らの行く先。

それを見届けるのも、悪くない。

「…ン?…セレン?」

「…ん?…ああ、すまん。少し、前の事を思い出してな」

「そうか…」

ウズミ…。貴様の死によって護った種は若葉となり大樹へと至った。そして今まさに人々を救うために葉SEEDを広げている。

この光景を、貴様が見ればなんと言うだろうか。

私に対して勝ち誇ったような笑みを浮かべるか?

フツ。それもいいだろう。

思えばこの世界に迷い込んでから、貴様らオーブとの関係は驚くほどに長かったな。こんな根無草である私たちの居場所が出来てしまいう程に。

だが、この世界は余りにも似過ぎてているんだ。私たちが居た、地獄のようなあの世界に。

高貴なる者たちは空へと昇り、そうでない者たちは皆、劣情感を味わいながら地上を這いつくばる。

そして人類のためには人の死を厭わない馬鹿ども。

核兵器。サイクロプス。眼前に浮かぶ要塞、ジエネシス…。

自然豊かだった緑の大地は、数々の兵器によって荒廃の大地へと変貌した。

頭の腐った馬鹿がすることなど結局どの世界でも同じ、という事か。

だからこそ私は目の前にいるこいつの事が気になった。あの世界で人類種の天敵となった、私の相棒最愛のことが。

だがその考えは杞憂に終わった。

いつだっただろうか、こいつに聞いたんだ。

あの世界で私を倒した後、結局お前の答えは成就したのか?と

その答えはノーだった。

「人類種の天敵となった俺は、この身が果てるまで止まらなかつた。全てを焼き尽くし、次の世代へ未来を託すために。俺が絶対的な天敵

として君臨し続けている間、残された人類は俺という敵と戦う事で結束し、企業が手を取り合い新しい未来を創ると思つた。…だが――

「所詮は上っ面だけの結束だつた。ということか」

「…ああ。結局俺はあの世界の本質を変える事はできなかったんだ」

無理もない。あの世界とはそういうものなのだ。

「だから俺は、この世界で抗う彼らを見届けることにした。彼らの掴んだ答え。それがあの世界で俺の掴んだ答えと、どう違うのか」

そう言つてこいつは先程までの悲壮感を払い、柔和な表情を浮かべて彼らキヲチの背中を見つめ直した。

…そうか。ならばそれが、この世界でお前が見つけた答Answerえなんだろう。

奇しくも、この世界に来て変わったのは私だけでは無かつたようだ。まあ…もし変わつていなかつたのなら、山ほど説教するところだつたがな。

だが、傭兵としては存外甘い男になつてしまつたようだな、お前も。そして、私も。

次の戦いがアルテリア・カーパルスほどの激闘となれば、こいつは負けるかもしれん。

…いや、今回の私は、お前側だつたな。そして、彼らも…。

…フツ。なんだ。考えてみれば今回の方が勝率は高いじゃないか。

あの時とは違い、こいつは今世界を壊す側でなく、私と共に守る側として立っている。それもこれも道を踏み外さなかつた彼らのおかげ…か。

ならば、今回こそ証明して見せようじゃないか。私“たち”の答Answerえを。

昔言えなかつた言葉音をまた胸にしまい込み、眼前に浮かぶジェネシスを睨む。

「これがお前にとって…いや、私たちにとって最後の戦いだ」

たとえ世界が変わり私たちが変わったとしても、ストレイドお前に掛ける言  
葉はあの世界にいた時から変わることはない。  
「生きて戻れ。それがお前の責任だ」